

来年は実がなるかも

ルカによる福音書のみに記載のある特殊記事を取り上げて、続けて御言葉に聴いています。今日は新共同訳聖書の小見出しでいうとふたつの記事をつなげてしまいましたので、コロナ対策で、説教の時間もいつもより短くしていることを考えると、欲張り過ぎたかなという感じもいたします。しかし、このふたつの出来事は「悔い改めなければ滅びる」という主イエスの教えとそれを引き取る形で「実のならないいちじくの譬え」が語られていますので、やはり、一緒に扱うのが良いと思います。このふたつを同時に読むことで、そこからわたしたちに届けられる福音の調べを聴き取りたく願っています。

初めに、確認しておきたいのはこの箇所キーワードとも言える「悔い改める」という言葉です。これは日本語では「悔いる」と「改める」の合わせ技で、悔いた結果、それまでと改まった生き方になるという筋道でしょう。聖書の文脈の中では、この言葉は神さまから離れて生きているわたしたちの向きが神さまへと向き直ること、整えられることを意味しています。悔い改めるは聖書のギリシア語では方向転換を意味する言葉だからです。これはわかりやすいですね。生き方の向きが変わる。神さまから遠ざかるのではなくて、神さまに向き合い、み顔を仰ぎ、近づく生き方へ向きを変える。このことは創世記3章に記されるアダムとその妻の神さまへの背きの箇所からも確かめられます。これは人間の最初の背きであり、キリスト教では原罪として語られるものですが、取って食べるなど命じられていた善悪の知識の木の実を食べた結果、ふたりの目が開けた。そして、神の顔を避けて園の木の間身を隠したというところに罪の性質がはっきりと刻印されています。「光あれ」といわれ、

光を創造し、混沌を制して乾いた陸地を創られた神、人間を創造された神に背いて身を隠した人間は、要するに回れ右をした。神を仰ぐことを止めて背を向ければどうなるか。光の反対は闇であり、命の反対は死であり、秩序の世界から混沌の世界へと人間は逆戻りすることになりました。人間の人間たる所以は、神に応答して生きること―レスポンスするアビリティを与えられていることが神のかたちを頂いた人間であったのに、それをみずから神のようにしたことによって破壊してしまったことが人間の悲劇の始まりであり、この見当違いを聖書は罪と呼びました。それは神の言葉に服従することをみずから拒絶した人間の姿です。それは今日の聖書箇所からいえば、実の实らないいちじくの姿と言っても良いでしょう。神さまとのつながりがキレているから、み顔を仰ぐことをしないから、自分中心に生きるしかない。前回、愚かな金持ちの譬えの箇所、わたしたちは神さまへの信頼を失っているから自分で思い悩まなければならない。「自分で」「自分のお金で」なんとかしようと思命になってしまう。それらすべてはみな、わたしたちが神さまへの信頼をなくしているためだと語りましたが、このつながりを回復するために来られたのが神の独り子であるイエス・キリストでした。悔い改めなければ滅びるとするのは、神さまとつながることなしに、わたしたちが、わたしたちを支えることは根本的に不可能だからです。命はわたしたちの自由になることではないからです。悔い改めは、神の語られる御言葉によって生きるためにわたしたちの生き方を自分中心から、神の言葉と対話する人間へとシフトさせることです。そのことを主イエスは繰り返し求めておられたのです。

さて、話が前後してしまいましたが、今日のテキストはイエスさまが話しておられるところに何人かの人に来て、ユダヤ総

督であるピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたと「ご注進！」とばかりに知らせたのですね。いまならテレビを見ていたら臨時ニュースのテロップが出る感じでしょうか。彼らにとってはとんでもないと思われる出来事だったのでしょう。なにしろユダヤ人の宗教はエルサレム神殿を中心とする祭儀がメインでしたから、そこにおそらく礼拝にきたガリラヤ人の巡礼者たちがピラトの治安部隊となんらかの衝突をして殺害された。彼らが捧げものとしてもってきたいけにえの血と彼ら自身の血が混じったというのは比喩的な表現ではないかと思われませんが、今日でも教会やモスクがテロの標的にされる事態はあるわけで、こうした事件が当時のユダヤ人たちのセンシティブな部分に触れたのは間違いありません。大暴動につながりかねない事態でしたし、主イエスにこの知らせをもたらしたのも、あなたはこの大事件にどうコメントするのですか、あなたの意見が訊きたいという気持ちが透けて見えます。イエスさまは人の心を見抜くことが出来た方ですから、彼らの発言のなかに潜んでいた問題性を見抜かれました。それはこういう被害にあった人たちは運が悪かったとか、たまたまというより、そこになにかの意味を与えて、読み取って、それを自分の確かさの保証としようとする、そういう差別化によって自分を特別なものに押し上げようとする心の働きです。因果応報の理屈に当てはめて、この世界を単純化して自分を安全圏に置こうとする心のゆらぎが見て取れるように思うのです。イエスさまのコメントは「とんでもない。その災難にあったガリラヤ人たちは、ほかのどのガリラヤ人たちよりも罪深い者だったからそんな目に遭ったのだと考えているなら、見当違いだ」というものでした。イエスさまは、わたしたち人間が勝手なものさしを振り回して出来事に意味付けをして、あれは罪深いからこんな目にあったのだ、

とか、素行が悪いからこんな目に合うのだといったレッテルを貼ることを否定します。だからここでイエスさまはシロアムの塔が倒れて下敷きになったという事故の例をひかれるのです。ピラトが神殿で引き起こした事件は人の意志の介在する人為的な出来事ですが、塔が倒れて人が下敷きになるのは事故です。しかし、わたしたちは地震や津波や洪水など、さまざまな自然災害などにも「神の裁き」や「神の罰」といった考えを持ち出してくる。これは不思議なもので、ふだん信仰心など持っていない人たちのほうが、大規模な自然災害や大事故が起きた場合に、神を持ち出すことが多いですね。日常が壊れて不条理が牙をむくとき、その責任を誰かに負わせようと躍起になる。神はどこだ。何をしている。そうでなければ誰かの責任だ。説明せよ、と自分の生きている世界において、いつ自分が当事者になるかも分からない不安に耐えられずに、神との繋がりが失われているからこそと言ったほうがよいかもしれませんが、倒れた誰かを悪者にして、自分は大丈夫だと、その災難に選ばれなかったことをもって救われていると安心するような見当違いをする。とんでもない。そんなことは関係ない。ピラトの治安部隊に殺された人々も、倒れた塔の下敷きになって死んだ人々も、彼らが罪深いから死んだのではない。その死に過剰な意味を読み込んではいけません。むしろ悔い改めなければあなたがたも同じように滅びるのだと言われるのです。よく知られた格言をもちいるならば「五十歩百歩」ということでしょうか。神さまの目から見た時に、わたしたち死を迎えるそのありさま、訪れによって、幸不幸を、わたしたち人間が評価するのは、五十歩逃げた人が百歩逃げた人を卑怯者とそしるような愚かな振る舞いに見える。あなたも逃げたではないか。人が迎える死、それは神が与える死であるわけですが、それを同じく死を迎える人間

であるあなたが評価するのか。それはすべて人間が自分の命を、死も含めてコントロールできる、いやコントロールしたいという無分別な願望の現れであって、人間はそのような時を見分けることは出来ないのです。真実に大切なことは、命の与え手であり、導き手であり、意味を与える存在である神さまとの関係を結ぶこと、そのためにあなたは生き方の向きを神さまのほうに変えなさいというのが主イエスの教えでした。そうでなければあなたも滅びるといわれる。神さまを見出すことのない闇のなかに、混沌のなかに飲み込まれてしまう。それが続く「実のならないいちじくの木」の譬えで強調されます。ぶどう園にいちじくの木が植えてあるのはちょっと不思議に思うかもしれませんが、ぶどうはつるを伸ばしてゆく植物ですからぶどう園のまわりにいちじくの木を植えておくと柵の代わりにもなったそうです。桃栗三年柿八年という諺がありますが、これにいちじくをイスラエルの律法に照らしてあわせますと、いちじくは3年で実り始め、4年目は神にささげる年で食べられず、5年目から食用としてよかったそうです。ですから、この譬えでもう3年もいちじくの木の実を探しに来ているが見つけたためしがない、というのは、木を植えてから最低で7年は経っている計算です。それだけ待っても実がみのらない。当て外れだ、場所ふさぎだから切り倒せというのは、主人の失望をよく示しています。この実らないいちじくは神に応答しないで生き、失われてゆく、わたしたち人間の姿を表しています。ところが園丁が執り成します。「ご主人さま、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って肥やしをやってみます。そうすれば来年は実がなるかもしれません。もしそれでも駄目なら、切り倒して下さい」。ここには主の執り成しが記されています。主は実らないいちじくにも次の機会を与えておられます。裁く神と、

執り成す子なるキリスト、そして両者を結び、わたしたちに働きかける聖霊なる神の三位一体の神の生き生きとした働きをここに見ることも許されるでしょう。そして何よりも、この13章1～9節を通して現されるのは、神の慈しみ深さであります。「悔い改めなければ、あなたがたも同じように滅びる」と宣告しながら、園丁が、実らないいちじくのために木の周りに穴を掘り、肥やしをやり、手を尽くされることが約束され、猶予が与えられています。そして、わたしたちは知らされています。もし、それでも駄目ならば切り倒してください。と執り成した園丁こそが切り倒される結末を。わたしたちのために執り成し、死んで下さった神の独り子の贖いによって、ついに新しい道が開かれる十字架と復活の物語を。死ぬべき身体をも生かしてくださる神の恵みと主の赦しの愛の深さ、広さ、測りがたさを、ルカの伝えるこの記事から味わって、悔い改めの許されているこの日が与えられていることを感謝し、主の備えたもう別の道を通して与えられた持ち場へ送り出されたく願います。

お祈りいたします。